



福井県 中学校長会の窓

福井県中学校長会
福井県中学校長会広報部
伊部印刷株式会社
越前市家久町29-8-1
TEL(0778)23-5037

第150号

令和7年7月15日発行

福井県中学校長会
会長 野路 佳男
(明道中学校)



福井県中学校長会
会長 野路 佳男
(明道中学校)

会長挨拶

く御礼申し上げます。

さて、現在学校では、人口減少・少子高齢化、グローバル化、多様性、デジタル化、人生一〇〇年時代等の課題によって、そのような世の中を生き抜く持続可能な社会の創り手を育成することが求められています。「正解主義」や「同調圧力」から脱却、一人一人の子供を主語にする学校教育の実現など「日本型学校教育」の良さを受け継ぎ、課題を乗り越え、更に発展させる新しい時代の教育、「令和の日本型教育」の実現に取り組んでいるところです。

また、昨年の十月には県が教育に関する大綱を改定いたしました。基本理念として、「一人ひとりの個性が輝く、ふくいの未来を担う人づくり」子どもが主役の「夢と希望」「ふくい愛」を育む教育の推進へこどものためにアクション!」このような県の理念を私たち校長が理解し、この大綱に書かれている目指す人間像を共有し、チーム福井として進めいくことが福井の教育の発展につながっていくと考えています。また、私たち校長には、働き方改革を進めること、部活動の地域展開などのように関わり対応していくかな

第74回 福井県中学校長研究大会

令和7年5月9日(金)
敦賀市プラザ萬象・敦賀市立図書館

学校現場では、いじめ、不登校、SNSトラブル等の生徒指導上の諸問題、LGBT等に係る人権問題、特別な支援を要する生徒への合理的配慮、教員不足、若手教員の育成、不祥事の根絶など課題は山積みであります。悩みは尽きません。県中学校長会におきましても、それらの情報を共有しながら、解決に向けての方針性を県教委や市町教委と連携を取りながら示していきたいと考えています。

本日の研究大会は、「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」を研究主題に掲げ、県内の中学校長の英知を結集し、諸課題の解決に向けて顔を合わせて研鑽を深める絶好の機会となっております。のちほど、四つの分科会に分かれて研究協議を行っていただきます。貴重な教育実践を御提供いただきごとに心から感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

最後になりましたが、本研究大会の開催にあたり、御指導と御支援を賜りました敦賀市、美浜町、若狭町の各市町当局をはじめ、福井県教育委員会ならびに二州地区の各市町教育委員会に対しまして、深く感謝申し上げますとともに、開催準備や運営に御尽力いただきました二州地区の校長先生方に心から御礼を申し上げ、御挨拶とさせていただきます。

役員名簿

令和7年度 福井県中学校長会

会長	(明道) 野路直孝
副会長	(松陵) 小島義和
副会長	(武生第二) 久島真一
会計監査	(坂井) 水上真一
理事	(勝山中部) 有島佳男
理事	(明道) 野路佳男
理事	(川西) 大正千春
理事	(灯明寺) 佐藤博明
理事	(丸岡) 山田常廣
理事	(金津) 常廣一
理事	(松岡) 野村常廣
理事	(金岡) 鈴木秀卓
理事	(勝山南部) 田邊千智
理事	(中央) 木村雄一
理事	(宮崎) 渡邉善信
理事	(武生第二) 久島博明
理事	(池田) 飯田進午
理事	(南越前) 今村雅裕
理事	(三方) 高橋善彦
理事	(小浜) 加藤憲和
理事	(高浜) 平田義和
理事	(成和) 竹野晃弘
理事	(光陽) 鈴木三千弥
理事	(大安寺) 堤典子
理事(進路対策)	(森田) 高間浩治
理事(広報)	(朝日) 幸坂浩
理事(人事行政財政対策)	(光陽) 竹澤宏保
理事(学力診断)	(美山) 岡本浩之
庶務幹事(庶務)	(明倫) 竹澤宏保
庶務幹事(会計)	(足羽第二) 岸上尚毅

事務局長
事務局員

小林 利幸
五十五嵐隆美

県教育長挨拶

福井県教育委員会

教育長 藤丸 伸和氏



すべき重要な指針であります。

昨年度改定しました「教育に関する大綱」および「教育振興基本計画」においては、人生一〇〇年時代における「ライフデザイン教育」を今後の教育の方向性の一つに位置付けました。本大会の研究主題は、まさにこうした考え方と目指す方向を一にするものと思います。

本日は、開会にあたり、研究主題に沿って、「ライフデザイン教育」の観点から、私の考えていることを大きく二点、申し上げたいと思います。まず、一点目は、「地域への自信と誇り」の醸成です。

私は長年、県職員としてまちづくりや人口減少対策などに携わってきましたが、福井県民はその謙虚さゆえか、地元の良さを積極的に語ろうとしない印象があります。もっと良くないのは、「福井には何もない」と自らを卑下する言葉をつい発してしまうこと。「福井には何もない」と言われて育った子供たちが、将来、福井に残りたい、戻ってきたいと思うでしょうか。

私の目標の一つは、この「福井に何もない」という言葉をなくすことです。新幹線が開業し、こうした県のため、多大なる御尽力をいただき、厚く御礼申し上げます。

本大会の研究主題「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」は、まさに今の時代における教育の使命を端的に表しており、私たちが共有

新幹線開業による全国的な知名度の向上や、駅周辺や観光地の開発等による「まちの光景」の変化、人の往来の活発化などが、「地域の自己肯定感」の高まりに寄与していると思います。

現在、進めていただいている「ふるさと学習」は地域への愛着を育むとともに、地域を支えている大人との交流を通じて、社会の担い手としての自覚を促す素晴らしい取組です。子供たちが福井の自然や文化、歴史・産業について学び、それ自らの言葉で表現することで、郷土への誇りや愛着が育まれるとともに、自分の考えを他者に伝える力も養われております。

こうした「ふるさと学習」は、持続可能な社会の創り手を育てるうえでも、非常に意義深い取組であり、また、「地域への自信と誇り」を育むことは、将来「ふくいで働き暮らすこと」への意識向上にもつながります。この意味においては、「ふるさと学習」は、「持続可能な地域づくり」に不可欠な取組であると言つても過言ではありません。引き続き、積極的に取り組みいただきますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

二点目は、「地域政策と連動した進路指導」への転換です。令和六年三月卒業の県立高校生の進路状況調査では、就職または進学で県内を選ぶ生徒の割合は、普通科系高校一六校の平均で

三六・二%だったのに対し、職業系高校八校の平均は七〇%でした。

職業系高校では地域・産業と結びついた実践的な教育を行っており、就職等に役立つ資格も多く取得することができます。求人倍率も高

く、専門的な知識や技術を身につけ、即戦力となるプロフェッショナルな産業人材を育てる職業系高校を、県教委として今後は、「プロ人材高校」と呼ぶこととしました。

「地域の宝」を数多く輩出している「プロ人材高校」の魅力をより多くの先生方、中学生、保護者の皆さんに知つていただけるよう、ガイドブックを作成しすべての中学生に配布するとともに、新たに「プロモーションビデオも制作しました。

今回の県立高校入試においては、全体の生徒数が減少する中、職業系高校への応募者数が前年と比べ増加しました。時代の変化をとらえ、地域に求められるプロ人材を育成する職業系高校の価値が見直

されてきた兆しを感じます。本日お集まりの校長先生方におかれましては、進路指導を担当する先生方を含め、ぜひ職業系高校の「いま」を知つていただきたいと思います。



「ふるさと学習」をさらに進め、「地域への自信と誇り」を育むこと、「持続可能な地域づくり」に向け、「進路指導の考え方」もアップデートしていくことを願い、皆様の御健勝と御活躍を祈念して、祝辞といたします。本日は誠におめでとうございます。

結びになりますが、本日の研究

大会が、今後の中学校教育をよりよいものへと導く実りある機会となることを願い、皆様の御健勝と御活躍を祈念して、祝辞といたします。本日は誠におめでとうござ

分科会報告

01 第一分科会

「カリキュラム・マネジメント」の推進 —中学校統合に向けた教育課程の見直しと工夫—

発表者 勝山南部中 田邊 千智

◎発表要旨

勝山市の人口は二万人余り、四年間で一〇〇〇人以上が減少し、出生数は昨年度七六人で少子化が人口減少とともに進行している。

そこで令和九年に現在の三校が統合され「勝山中学校」が開校する。勝山高校の敷地内に校舎があり、共用棟もある併設型に近い形での「連携型中高一貫教育」となる。このことが教育課程の編成に大きくかかわってくる。

①高校との連携を視野に入れた教育課程の編成

P.T.はまず総合的な学習の時間の延長に活用し、地域や保護者と連携して地域貢献活動につなげるなど、より探究的な学びと活動の時間を確保できた。生徒会活動では、生活委員会が学期末に学年を解いた小グループによる全校学習会を企画・運営した。また校則などを見直すため、生徒会執行部が「ドームテープルⅡ」、「二・三年生が探究の中間発表にあたる二月の「ラウンドテーブルⅡ」、「二・三年生が探究の成果を発表する翌年七月の「学びの祭典」がある。「ラウンドテーブルⅡ」に勝山市内の中学二年生が全員参加、見学し「学びの祭典」には中学生三年生が全員参加するように計

○高校との連携について
【質問・意見】

・総合以外の教科での交流は過去に英語で試みたことはあつたが距離があり難しかった。統合後は、高校教員が数学や英語においてTTTで指導に参加することは計画している。

・明倫中は羽水高との連携を計画中。武生三中は武生高との探究活動を始めている。

(勝山中部中 有島直孝)

勝山高校の探究活動のスケジュールは、一年生テーマ決定の「ラウンドテーブルⅠ」、「二・三年生が探究の中間発表にあたる二月の「ラウンドテーブルⅡ」、「二・三年生が探究の成果を発表する翌年七月の「学びの祭典」がある。「ラウンドテーブルⅡ」に勝山市内の中学二年生が全員参加、見学し「学びの祭典」には中学生三年生が全員参加するように計

②統合に向けた三中学校の工夫
市内三中学校は、考查問題を各

・鯖江中学校は元の丹南高校を仮校舎としている。そこでは鯖江高校の生徒の授業があり、高校生の作ったプログラムで教えてくれたり、体育の授業で模範演技をしてくれたりお互いによい成果があつた。中高の時間割が違うのでノーチャイムで動いている。特別教室への移動などはお互いに気

教科の教員で分担・協力して作成している。目指す学力の一本化とテスト問題作成の時間短縮(働き方改革)が図られた。ワークシートや指導案も共有フォルダに入れて活用するなど広がりがある。

また年間計画において体育祭や学校祭、考查など大きな行事の実施時期を同じにして、三中の交流授業や活動を計画しやすくした。

・勝山高校は普通科も探究を行っているので、探究特進科とだけ連携しているのではなく、高校生が対象。毎回決まつた高校生が来るのではないか。心配したトラブルはなかった。

・授業時間四五分の運用は本当に標準時数を満たすことができるのか。時程の変更はスクールバスクラスから離れてもよいとしたが希望は増えた。猶予を与えるのも必要だと感じる。

・現在連携を行っている中学校では、当初高校生と中学生のトラブルを心配し、生徒同士が重なる部分を避けるよう計画する動きもあつたが、実際に生活してみると学校祭、考查など大きな行事の実施時期を同じにして、三中の交流授業や活動を計画しやすくした。

・勝山高校は普通科も探究を行っているので、探究特進科とだけ連携しているのではなく、高校生が対象。毎回決まつた高校生が来るのではないか。心配したトラブルはなかった。

・授業時間四五分の運用は本当に標準時数を満たすことができるのか。時程の変更はスクールバスクラスから離れてもよいとしたが希望は増えた。猶予を与えるのも必要だと感じる。

を遣つて静かにできていて問題はない。

・現在連携を行っている中学校では、当初高校生と中学生のトラブルを心配し、生徒同士が重なる部分を避けるよう計画する動きもあつたが、実際に生活してみると学校祭、考查など大きな行事の実施時期を同じにして、三中の交流授業や活動を計画しやすくした。

・越前中の丹生高との連携型中高一貫教育では、中二で連携クラスを決定するが、希望生徒が集まるのが現状。一度決めても連携クラスから離れてもよいとしたが希望は増えた。猶予を与える

・松岡中は四五分授業はNGと示されている地域もある。標準時数を満たすことができるのか。時程の変更はスクールバスクラスから離れてもよいとしたが希望は増えた。猶予を与えるのも必要だと感じる。

・松岡中は四五分授業を実施。家庭学習で予習することで五分短い授業をカバーしている。

・松岡中は四五分授業を実施。家庭学習で予習することで五分短い授業をカバーしている。

・角鹿中は小中一貫校で教員同士の乗り入れがある。児童・生徒の成長の様子が分かり先生方にも良い影響がある。

・芦原中は金津高校と中高一貫連携クラスがある。高校生の姿を見て将来的自分を見ることにつな



02

第二分科会

**健康で安全な生活と豊かな
スポーツライフを実現するための教育の充実**
～安心・安全な生活と豊かなスポーツ文化活動を生み出し、自走す
（主走）を育成する（学交改革）～

◎発表要旨

小浜第二中学校では平成二十九年度から令和七年度にかけて学校改革を基軸とする「安心・安全な生活と豊かなスポーツ文化活動を生み出し、自走する生徒を育成」するための取組を進めてきた。

①組織体制構築と チーム運営による課題改善

●学校改革の途筋

「運営委員会」の権限強化一報告・連絡・相談の徹底、重点目標の共存化等、全教職員が学校運営に参

画する組織づくりと、子どもを中心とした教育活動への見直しを進めた。また、形骸化していた「わたくしたちのちかい」をリニューアルし、生徒主体の学校づくりを進めるための経営ビジョンを受けての全教職員参加型チームで目標設定と進捗管理と結果分析を行う学校評価システムを始動した。継続的・発展的に改革が進むよう、次年度の計

画案作成にあたってはプロジェクトチームを組織し、パブリックコメントを加味した修正を行いながら、全教職員の合意のもと、次年度に引き継ぐ流れを開発・定着させた。「双方向・参加型学校だより」の発行やブログの活用等により、学校・保護者間情報の送受信を充実させた。

②生き生きとした学校、

●「二中魂」の具現化
生徒主体の活動を創る

● 「子供を守り育てる」意識の醸成と共有する公的「ミニユニティ」形成の必要性
「カンファレンス方式の行内研修」を通して、教員同士が世代や立場を超えて語り合い省察する「公的

- 組織構成の抜本的見直し
育成参画型の組織体制により成果を上げてきたが、昨年度より校務分掌の抜本的見直しを図り、分散統合・消去・追加を行った。
- 部活動地域移行の行政・
地域団体・学校連携
市内二つの中学校間で働き方改革や地域に開かれた学校という観点で部活動の見直しを進めた。市教育委員会の配置や検討委員会の設置等、条件整備や保護者への説明を行ってきたが、課題も残っている。行政と地域団体と学校とが同じテーブルで具体的に話し合う場を設けながら、より具体的な解決案を見いださなければならぬ。

◎研究協議

市内二つの中学校間で働き方改革や地域に開かれた学校という観点で部活動の見直しを進めた。吉教委もコーディネーターの配置や検討委員会の設置等、条件整備や保護者への説明を行ってきたが、課題も残っている。行政と地域団体と学校とが同じテーブルで具体的に話し合う場を設けながら、より具体的な解決策を見いださなければならない。



03

第三分科会

自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実

発表者 森田中 高間 祐治

◎発表要旨

森田中は、年々生徒数や学級数が増え、次年度からは九頭竜中学校として新たなスタートを切る。

生徒は、素直で人なつっこいが、一小一中のため人間関係等の変化が乏しく、新たな自分づくりや将来に夢を抱くことに積極的になれ

ない生徒が多いようである。そこで、生徒指導上の諸課題を解決するに、「生徒指導摘要」で示された「二軸三類四層構造」に準じて、以下の実践を行った。

①九頭竜中学校に向けて「魅力ある学校づくり」繋ぐ伝統と新たな文化づくりを利用した生徒・教職員

○教職員研修
・協働で行う生徒指導

七割の教職員が若手で経験が浅いため、年度の早い時期に「協働で行う生徒指導」と題して研修会を主催している。「生徒指導とは」、「発達支持的生徒指導」、「具体的的事例で、「ロールプレイ」で構成し、教師の力量形成と生徒の健全育成の土台を作っている。

・ポジティブ教育

生徒の人間関係形成力の低下、不登校生徒の増加などを踏まえ、令和五年度からポジティブ教育に取り組むことにした。県教育総合研究

所の有田留美子先生を迎えて、ポジティブ教育やピア・サポートについて理解を深めた。六年度は学校適応感尺度「アセス」の見取り方や愛着に課題のある子どもの捉え方、愛着の視点からの支援方法などについて、実際のデータを元に研修を行った。

○校内SR（サポートルーム）の運営

不登校気味の生徒だけでなく、個に応じた学習室として、集団での学びが苦手な生徒に対する教室と位置づけている。いきいきサポートーーと学習支援員が常駐し、個別の支援計画をもとに学びを進めている。オンラインで教室とつなぎ、リモート学習もできるようになっている。また、管理職や担任、教科担任との連携も頻繁に行なうとともに、各生徒の「主体的に学習に取り組む態度」の評価に関して規準を作り、全職員で共通理解した。

○生徒会を中心とする校則改正

七割の教職員が若手で経験が浅いため、年度の早い時期に「協働で行う生徒指導」と題して研修会を主催している。「生徒指導とは」、「発達支持的生徒指導」、「具体的的事例で、「ロールプレイ」で構成し、教師の力量形成と生徒の健全育成の土台を作っている。

・ポジティブ教育

生徒の人間関係形成力の低下、不登校生徒の増加などを踏まえ、令和五年度からポジティブ教育に取り組むことにした。県教育総合研究

自由に生徒会を中心いて活動する。この対処的生徒指導に関する実践を行っても、組織化し迅速に対応できる体制を整えておく必要がある。

さや他学年との交流メッセージなどを掲示するコーナーを設置し、啓蒙活動にも取り組んだ。

○異学年交流探求学習報告会



その後、各学級会で生徒全員の意見を集約して、生徒総会で再度、生徒会提案で議論し、

改正案が練り上がった。この改正案は、九頭竜中学校の校則としても受け継がれていくことを生徒が意識して改正したことの大いなる意味があると考える。

②豊かな人間関係の構築のための他者との協働による活動の工夫

○道徳教育

内容項目の似ている題材で二、三時間のユニットを組み、より深く考えられるように指導計画を立てた。議論する道徳をめざし、ロイロノートなどを利用することで、普段自分から意見を発表しない生徒の意見も共有しながら、考えが深まる時間となっている。振り返りを道徳ファイルにポートフォリオとして残し、学期末や年度末には、自分の変容を客観的に振り返る時間をマークが付いていれば、どのようなものでもよいと変更したことに影響され、令和六年度の前期生徒会が動き出した。「校則は職員会議を受けて、校長の許可が必要である」これまで自転車通学のヘルメットは安全

・学年を越えた「縦糸」を作る指導と学年間の「横糸」を作るしかけ

・相談室や校内SRでの学習内容についても、地域の方と交流するこ

とを通じて、地域で生きている実感が湧いたようである。

○成績と課題

・学習指導と生徒指導とは表裏一体であり、指導力向上の研修は、なおいっそう具体的で実践的な取組を行っていくなければならない

ない。

・学年を越えた「縦糸」を作る指導

と学年間の「横糸」を作るしかけ

認め合う大切さを当事者の講演か

ら学び、縦割りグループで話し合い活動を行った。また、道徳係と一緒に「心のひろば」という各クラスの良

他の存在を認め合い、互いに支え合ひ助け合うようになってきた。

・上のような実践を行っていても、「困難課題対応的生徒指導」は発生する。この対処的生徒指導に関しても、組織化し迅速に対応できる

体制を整えておく必要がある。

○研究協議

・森田中のボランティア活動は、学年や部活動に割り当てるのではなく、自らが立候補した生徒集団

で活動しているのが素晴らしい。

・地域ボランティアなどの取組が、地域への参画意識や愛着を生み、ひいては生徒の健全育成に強く

影響を与えると考へる。

・校内SRの支援員と学級担任の連携が大切である。多くの学校において、教育相談担当や特別支援教育コーディネーターが主体的に間をつないでいる。

・相談室や校内SRでの学習内容に経験上、校内SRをなるべく職員室の近くに設営した方が、学級担任や学年教員が授業の行き帰り

員が責任をもって設定している。

・経験上、校内SRをなるべく職員室の近くに設営した方が、学級担任や学年教員が授業の行き帰りや空き時間に関わりやすくなる。

・発表内で述べられていたように、初期対応の遅れがないように、職員間の日々の報告・連携を密にしておくことが重要である。また、

ファーストコンタクトを誠実に

対応することの大切さ等を自校の教員にも伝えたい。

04 第四分科会

「令和の日本型学校教育」を担う教師の育成 ～校内研修を楽しむ学校文化の創造～

発表者 丸岡南中 上田 裕明

「令和の日本型学校教育」を担う教師の育成 ～校内研修を楽しむ学校文化の創造～

（）校内研修を楽しむ学校文化の創造～

◎発表要旨

本校の特色である「教科センター方式」や「スクエア制」を活かしながら、教師が個々の指導力を磨くとともに、チームとしての教育力・課題解決力を高めること、ICT活用指導力を高めること、また、地域等と連携・協働し、組織的に課題解決に取り組むことをめざし、○JTをより積極的に進める研修の在り方について研究を進めることとした。

①「研究の日」の在り方

「研究の日」の内容は、異なる専門性や経験、得意分野を持つ教員を三つのグループに分け、相互にじっくり聴き合う活動を基本とした。テーマに合わせて多角的なアプリーチを経たものを別の機会に練り直し、整理する作業を継続的に行ってきた。

◆成果と課題

他の教員との協働により、自分の知見を広げたり、自分の取組に対する問い合わせをしたりなど、都度、新鮮な気持ちで取り組む教員が多く見られた。また、「研究の日」を重ねていくことにより協働体制も整い、教員の心理的安定性の確保にもつながった。

②学校経営への参画意識の向上

年度初めの「研究の日」に、学校経営方針における具体的な取組の

見直しを行った。主な内容は、取組内容をより具体的にすること、成果を評価しやすいようにすることをめざし、「○○を図るため○○を○回行う」のように、教員の行動目標の形に改めることとした。

◆成果と課題

各分掌の組織としての意思統一を図ることや、初めての担当や新任教員であっても、詳細な実施計画を立てやすいようにすること

④ICTの効果的な活用を進める

教科指導におけるICT機器の効果的な活用については、生徒が自分の考えをまとめ、発表や表現することで、学校内の円滑なコミュニケーションや協力体制の強化にもつながった。

具体的な取組を数値化することにより、年度途中の進捗状況も確認しやすく、適切に指導・助言を行なうことができ、教員の達成意欲や主体性を引き出すとともに、自分事として捉える機会にすることができた。

◆成果と課題

「教科センター方式」のねらいや「生徒にとって学びやすい学校」という学校の理念をより理解するために、教科部会の活性化を図ることとした。

③教科の専門性の向上

日中は原則としてメディアセンターで過ごし、相互に授業を見合つて、絶えず情報交換・意見交換を行なった。

○探求アドバイザーの活用

坂井市教育委員会が委嘱した探究アドバイザーによる研修を行なった。

い、授業改善を図ることとした。授業改善に関する協議や公開授業の指導案の検討等の際に、教科部会に他教科の教員も交え、率直な疑問や新たな視点を反映できるようとした。

企画案の発表の際には、SDGsパートナー・シップ企業・福井県庁・パーソナル・コーディネーターの方を助言者として招き、スクエア班に二名ずつ配属された教員にとっては、安心して授業に臨むことができた。また、他教科の取組を自身の授業改善に活かす機会にもなった。

◆成果と課題

生徒が実際の産業界や公共機関の方と触れることにより、教科書の知識だけでなく、実際の社会で必要とされるスキルや知識を学ぶことができるが、このことは教員も同様である。

教員も、社会が抱える課題やそれに対するアプローチを生徒とともに考え続けることで教育の質の向上につなげることができた。

○研究協議

【グループ協議の柱】

○新たな教師の学びの姿を実現する研修の在り方について

●週一回四〇分程度、若手教員中心に課題を出し合い研修を積み重ねている。意見を出しやすい雰囲気で研修ができるようになっている。

年度初めに、校内でテーマを決め、学年や教科を解いて四グループに分けて、年間を通して授業参観や研究会を実施している。

探求アドバイザーの活用が滞っていた教員も、真似をしてみたり、得意な教員をT2として招いたりなどして積極的に活用するようになった。

研究会の研究主題やテーマについて、研究主任や推進委員等が自分で、研究の言葉で語るように共有し、研究を進めることができた。

（春江中 近藤光彦）

た。海外を含め民間企業勤務の経験があり、現在は経営者でもあると、いう方から、エビデンスを重視した探究学習の重要性を学んだ。

◆産官学との連携

企画案の発表の際には、SDGsパートナー・シップ企業・福井県庁・パーソナル・コーディネーターの方を助言者として招き、スクエア班に二名ずつ配置された教員にとっては、安心して授業に臨むことができた。また、他教科の取組を自身の授業改善に活かす機会にもなった。

◆成果と課題

生徒が実際の産業界や公共機関の方と触れることにより、教科書の知識だけでなく、実際の社会で必要とされるスキルや知識を学ぶことができるが、このことは教員も同様である。

教員も、社会が抱える課題やそれに対するアプローチを生徒とともに考え続けることで教育の質の向上につなげることができた。

○研究協議

【グループ協議の柱】

○新たな教師の学びの姿を実現する研修の在り方について

●週一回四〇分程度、若手教員中心に課題を出し合い研修を積み重ねている。意見を出しやすい雰囲気で研修ができるようになっている。

年度初めに、校内でテーマを決め、学年や教科を解いて四グループに分けて、年間を通して授業参観や研究会を実施している。

（春江中 近藤光彦）

の様子も分かり、教職員同士のつながりも深まり効果がある。

・幼小中でペアやグループをつくり、グループ毎にテーマを決めて意見交換を含めた研修を計画している。お互いに連携しながら活動するところで教育効果が期待できている。お互いに連携しながら活動するところで教育効果が期待できている。

・各学年一学級の特設授業を設けて全教員が授業を参観し、研究で働き方改革の中で、どのように研修の時間確保するかが課題となっている。

・研修後の「アウトプット」が大切である。授業が教員にとってアウトプットの場となる。それこそがモチベーションの向上につながる。

・学校の研究主題やテーマについて、研究主任や推進委員等が自分が言葉で語るように共有し、研究を進めることができた。

（春江中 近藤光彦）



合う集団づくりを進め、教職員が相互に学び合い、高め合う組織を構築したいと考えます。保護者の視点では、学校だよりの発行、学校公開や「校長とざつくばらんに話し合ふ会」の実施を行い、保護者が安心できる学校にしていきたいと思います。

目標とする学校像の実現に向け、今後も職務を通して自分の無知に気づき、学び続けるように頑張っていきます。

春風を以て人に接し……

越前中学校長 山本 貞郎



丹生郡越前町
の海岸沿い、南北
にびる越前地区
の中央に本校はあ
ります。私は、本
校を四年前に卒業し、平成八年度か
ら五年間、教諭としてここに勤務しまし
た。この度、校長として母校に赴任でき
たことは、大変幸せであると同時に、地
域からの注目や期待に緊張も一入です。

さて、本校は令和五年度に創立五〇
周年を迎える。この五〇年の間に生
徒数は激減し、創立時は四七〇人を超
えていた生徒数が、今では七〇人を切っ
ています。少子化の波に抗いながら小規
模校の強みをいかし、生徒一人一人に目と
声と心を配り、きめ細かであたたかい教
育を進めたいと考えています。

本校は、小高い丘の上にあるため、生
徒は、毎朝急な坂道を歩いて登つてきま
す。夏には猛暑の中、大汗をかきながら、
冬には風雪の中、寒さに凍えながら毎日
登校してくるのです。そのような彼らに
対し、私たち教職員は、「今日も偉かった
ね」「毎日頑張っているね」という気持ち
で接していきたいものです。

教育目標「自ら求め、磨き、高め合う
生徒の育成」へ向かう第一歩として、同
僚・生徒・保護者へのリスクペクトを大切に
していきたいです。

しらやま魂

武生第五中学校長 八田 天



本校は越前市の
一番西方の白山地
区の「やまがれ」
と呼ばれる高台
にあり、全校生徒
二六人、職員二人の小さな学校です。か
つては三〇〇人近くの生徒数でありまし
たが、現在は平成四年に建てられたきれ
いな校舎とグラウンドで、少人数で伸び
伸びと活動をしています。

地域とともに歩む「開かれた学校」と
して、スイカづくりと販売、サギ草の栽
培、そしてコワノトリの舞い降りる美しい
自然を学びの舞台に、日々生徒たちは生
き生きと学んでいます。その成果として
昨年は「ふるさとの学び特別賞」にて優
秀賞をいただいたり、創作アイデアロボッ
トコンテストの全国大会にも出場し、審
査員特別賞を受賞できたりしたことなど
も、子供たちの自信につながりました。

しかし、近年人口減少の影響は本校
にも及び、今後の学校の在り方を地域と
ともに真剣に考える毎日となっています。
しかし、学校はこの「小ささ」を強みに変
え一人一人の顔が見える教育、地域と
子供たちが地域を誇りに思い、自信と笑
顔にあふれる学校づくりを、これからも
地域と一緒に元気に進めていきます。

ふるよとの未来を創る

池田中学校長 飯田 雅裕



本校は、足羽川
の上流の四方を緑
豊かな山に囲まれ
た盆地の中央に位
置し、創立七八年

けだ」「こじもと森」「フォーシーズンテラ
ス」などの観光施設も建設されました。
中京圏からの交通量が増え、町の賑わい
が増しています。

池田町の特色ある研究として、こども
園、小学校、中学校の教員が合同で池田の
教育研究を行う「幼小中研究会」があり、
昭和五三年に前進の小中研究会が発足し
てから、四七年になります。今年度も八年
目になる「ポジティブ教育・協同的な学び」
を中心に据えて取り組んでいます。

今年度の本校の学校教育目標は、「ふ
るさとの未来を創る生徒の育成」を掲げ
て、主体的・探究的に学習する生徒・自主
的・行動できる生徒・心身共に健康でた
くましい生徒・社会に貢献しようとする
生徒の育成に努めてまいります。

東浦中学校長 藤岡 歩



みかんの丘にあ
る本校は、県下唯一
の「小規模特認校」
として地域の特色
を生かした教育を
行っています。地元の子供たちと、市内様々
な所から通う子供たちが一緒に学び、交流
を深めることで多様な価値観や友情を育
んでいます。互いの違いを尊重し励まし合
う姿は、まるでこの大きな家族のようで
あります。校長としてその家族の一員に加わるこ
とができるとも嬉しく思っています。

当校では、小学校と中学校が一体とな
った九年間の一貫教育を実施しています。長
期にわたる学びの連続性を確保し子供た
ちが安心して成長できる環境を整えてい
ます。全学年、教科担任制を導入し、小
学校教員が中学校で、中学校教員が小学
校において授業を担当し、学習内容のつな
ぎを深め子供たちの理解を促進してい
ます。また、地域の自然や文化を活かし、
みかん栽培や地域行事を通じて地域との
つながりや自然の理解も深めています。

特色を生かして

内浦中学校長 松井 昭男



本校は、福井県
と京都府との県
境に位置する小・
中併設のへき地校
で、海と山に囲ま

けだ」「こじもと森」「フォーシーズンテラ
ス」などの観光施設も建設されました。
中京圏からの交通量が増え、町の賑わい
が増しています。

こうした実態踏まえ、少人数の
性を大切にし、温かい学びの場を築いてい
きたいと考えています。地域と連携しながら
自然豊かな環境の中で、安心して成長
ができます。そのため、本校
の生徒は素直で思いやりがあり、上級
生が下級生の面倒をよく見、互いに相
手のことをよく理解した上で交流する
ことができます。

校長としての「自芯」をもつて

名田庄中学校長 山本 育

本校に赴任するま
での五年間、五人の
校長先生方の
下で教頭職を務め
させていただきました。コロナ禍、年目に
「子供の命・安全第一」を掲げられ、感
染防止対策を含めた安全管理の徹底に
注力された一人目の校長先生。コロナ禍
でも「学びを止めない」を合言葉に、積
極的な校外探究学習を推進する等、学
びの充実を最優先された二人目の校長
先生。へき地複式校にて「子供とともに」
をモットーに、常に子供の輪の中に入つて
活動された三人目の校長先生。「現状
維持は退後と同じ」を戒めに、学校DX
を強力に推し進められた四人目の校長
先生。「誰一人取り残さない」の言葉ど
おり、不登校傾向にある子供への献身
的な対応に尽力された五人目の校長先
生。いずれの校長先生も確たる信念い
わば「自芯」をもって学校経営にあたり、
学校組織を動かされていましたことを、最も
近い立場から学ばせていただきました。

この貴重な学びを土台としつつ、目の
前の教育課題と対峙しながら学び続け
ることで、自分なりの「自芯」をもって、
本校の子供の幸せ、教職員の幸せを実
現させるために邁進していきます。

編集後記

会員の皆様の御協力を賜り、
第一五〇号発刊の運びとなりま
す。全学年、教科担任制を導入し、小
学校教員が中学校で、中学校教員が小学
校において授業を担当し、学習内容のつな
ぎを深め子供たちの理解を促進してい
ます。また、地域の自然や文化を活かし、
みかん栽培や地域行事を通じて地域との
つながりや自然の理解も深めています。

令和七年度も、気がつけば夏
の暑さが本格的になる季節を
迎えました。皆様の御健康と御
多幸を心よりお祈り申し上げ
ます。

〔広報部〕

